

所蔵：宮沢賢治記念館

On/Off 拡大 縮小 リセット 使い方

### 参考資料 No. 4

#### 基本情報

宮沢賢治愛用チェロ  
サイズ 128.5cm×44.0cm  
購入時期 1926年（大正15年）  
使用場所 羅須地人協会（らすちじんきょうかい）など  
製作 鈴木バイオリン

#### 作品解説

「セロ弾きのゴーシュ」、「雨ニモマケズ」で知られる宮沢賢治が購入し、自ら演奏した楽器。賢治ゆかりの品の多くは花巻空襲の被害を受けたが、友人の手元にあったこのチェロは無事であった。戦後宮沢家に戻り、現在は花巻市の宮沢賢治記念館にて展

#### みどころ

- ① 鈴木バイオリンNO. 6
- ② 1926年 K. M.
- ③ 裏板（うらいた）
- ④ エンドピン
- ⑤ 駒（こま）

日本語 ENGLISH

### ① 鈴木バイオリンNO. 6

MANUFACTURED BY MASAKICHI SUZUKI  
NAGOYA, JAPAN NO. 6  
鈴木バイオリンの大正期の商品カタログによると、NO. 6はチェロの最上位モデルで当時の価格は170円、弓とケースを加えると238円となる。農学校教員であった宮沢賢治の給料は100円前後であったといわれる。

宮沢賢治愛用チェロのラベル



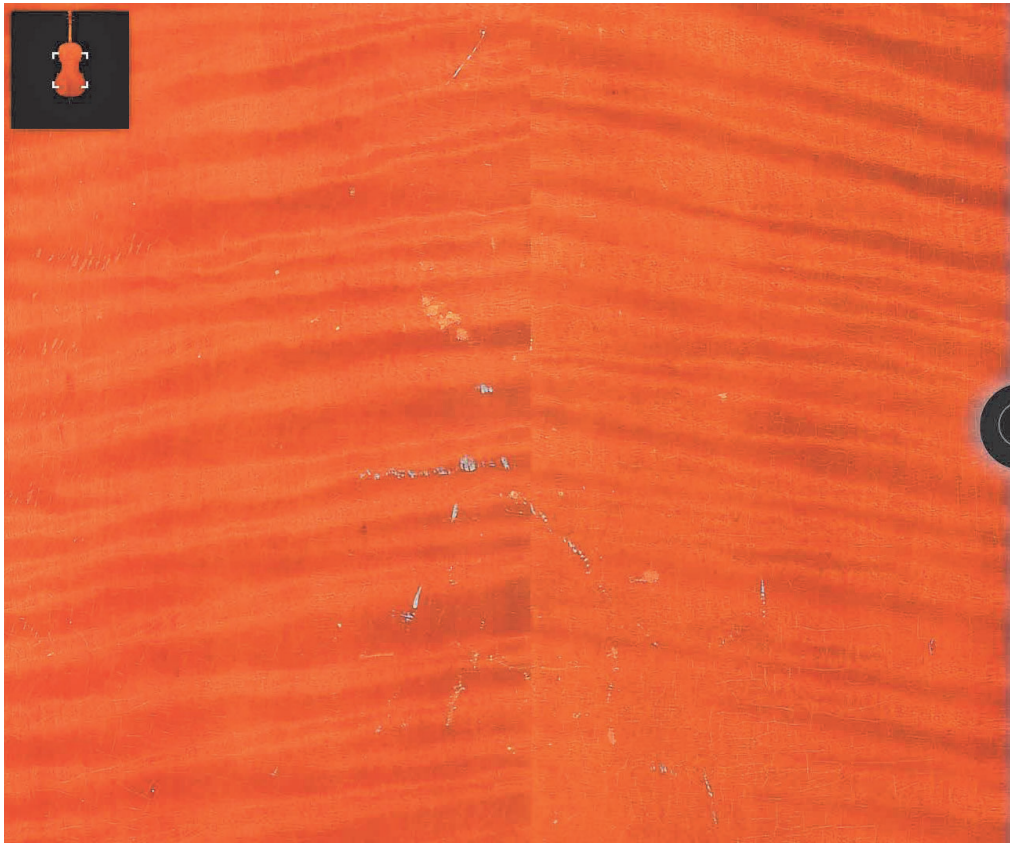


## ② 1926年 K. M.

賢治によって書かれたと思われる購入年と自身のイニシャル。  
手書きの文字の下にメーカー名などが透けて見え、Mに続くピリオドはラベルからはみ出している。水彩絵の具と思われる彩色材料を細筆に付け、チェロ胴体のf字孔から差し入れて書いたと考えられる。

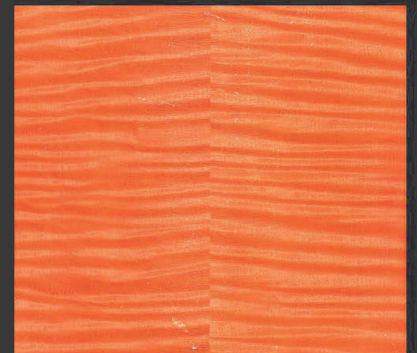


宮沢賢治愛用チェロのラベル



## ③ 裏板 (うらいた)

鈴木バイオリンは1926年（大正15年）10月、十数個の楽器を携え渡欧し、著名演奏家たちを訪ね歩いている。  
「小生は名古屋市鈴木政吉氏のバイオリン1個試弾せり。（中略）形姿（けいせい）は甚だ（はなはだ）美しく、且つ（かつ）ニスは美しき色を有す。」これは、ウィーンフィル第一コンサートマスターを長年務めたアルノルド・ロゼー氏が鈴木政吉に贈った賛辞である。当時の会社パンフレットに掲載され、鈴木政吉が楽器の美しさにもこだわっていたことをうかがわせる。  
弦楽器の表板はスプルース（松）、裏板・側板はメイプル（楓）で作られ、賢治のチェロの裏板には、高級楽器に見られる虎杣（とらもく）という美しい縞模様の杣目が認められる。







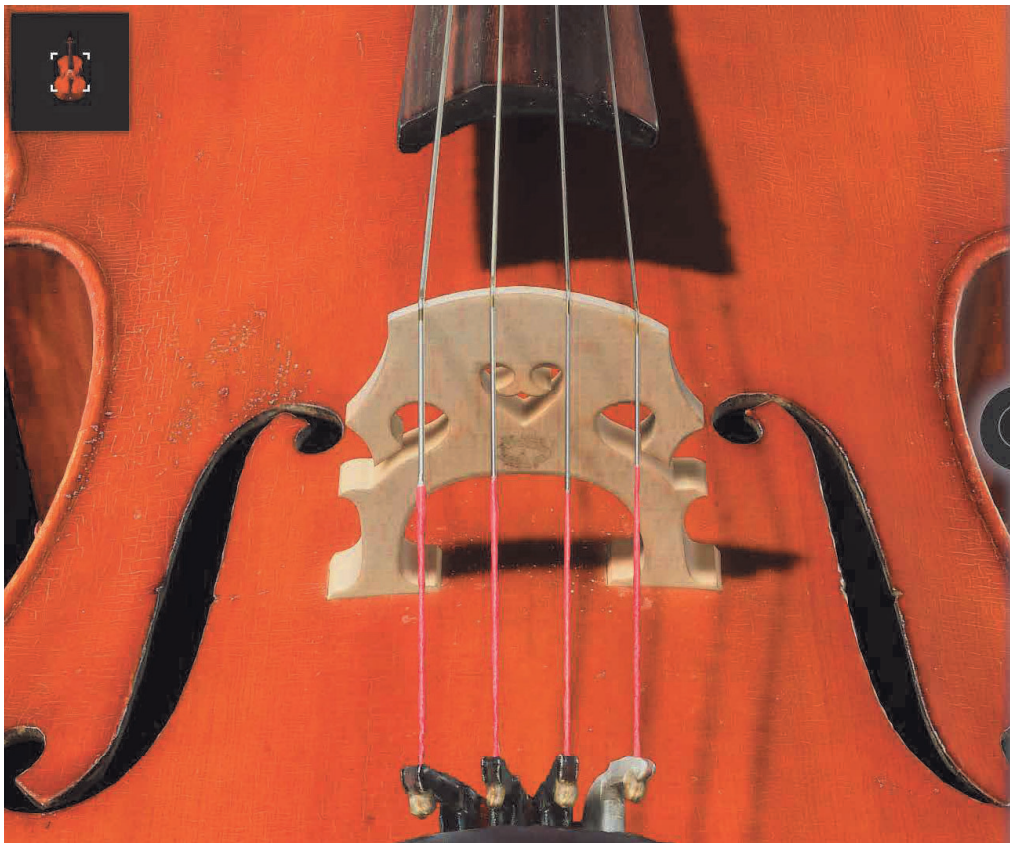
#### ④ エンドピン

エンドピンとは床に立ててチェロを支える棒のことである。賢治が購入した当時（1926年[大正15年]）のエンドピンは木製であったが、のちに現代の主流である金属製に置き換えられている。

エンドピンの交換は、宮沢賢治記念館の開館を機に1970年代に鈴木バイオリンにおいて行われた。現在の仕様とは異なる70年代の鈴木バイオリン製チェロのエンドピンとエンドピンホルルの様子を見ることができる。



修理の施されたエンドピン



#### ⑤ 駒（こま）

2016～17年（平成28～29年）、地元岩手の弦楽器職人の手でオーバーホールが行われ、ニスの補修などとともに駒の取替えも行われた。賢治のチェロを後世に伝えるため、その後も定期的なメンテナンスが施されている。

駒（こま）とは、弦を支え振動を表板に伝える部品で、メープル（楓）で作られており、楽器の状態や個性に合わせて形や立て方が調整される。



駒（こま）